

Béisbolを通してみたグローバリゼーション —「ベースボール・レジーム」の先にあるもの—

石原 豊一

はじめに

2013年のワールドベースボールクラシック（WBC）は、メンバーのほとんどをメジャーリーガーで固めたドミニカ共和国（以下ドミニカ）が初優勝を飾った。3連覇を目にすべくサンフランシスコに集った日本人ファンの網膜には、準決勝の土壇場、1、2塁間で呆然と立ち尽くしたランナー、内川聖一がプエルトリコの捕手ヤディアー・モリーナにタッチされアウトになったシーンだけが焼き付いた。決勝はドミニカ対プエルトリコのカリブ海勢同士の対決となった。

両国は、ともにスペインの統治を長らく受けたが、米西戦争（1898）後、米国の強い影響下に置かれるようになった。その結果、両国には早い時期から野球が浸透し、やがてメジャーリーグ（MLB）への人材供給地となっていった。このような歴史を考えると、両国が「世界一」をかけて争ったことには何の不思議もない。

この両国だけでなく、同じカリブ海地域では、キューバが長らくプロの出場しない国際大会を席巻していた。また、オランダ領キュラソー出身のウラディミール・バレンティンは、昨年、日本プロ野球のシーズンホームラン新記録を打ち立て、ファンの話題をさらった。

加えて、一般にはサッカーの大陸と思われている中南米でも、メキシコ、ベネズエラには長いプロ野球の歴史があり、近年ではニカラグア、コロンビア、パナマに新リーグが立ち上げられただけでなく、エルサルバドル、アルゼンチンからもプロ野球選手が輩出されるようになってきている。WBC第1次ラウンドにおいて、旋風を巻き起こしたブラジルを目の当たりにして驚いた人も多だろう。

以下では、米国生まれのスポーツである野球が、ラテンアメリカにどのように浸透し、それが現地の人々にどう受容されているのかを、グローバル化論の視点から見ていく。

1. 「ベースボール・レジーム」：野球のグローバル化によって発生したネットワーク

スポーツの世界においてグローバル化が進んでいることは、オリンピックなどのメガスポーツイベントの隆盛や、MLBの衛星中継などから理解できるだろう。

野球のグローバル化研究の第一人者と言えるのは、Kleinである。*Sugar Ball* (1991) において、経済格差によりアメリカ野球への人材育成を「下請け」するドミニカ野球という構図を指摘した彼は、*Baseball on the Border* (1997) においては、メキシコ野球の観察から、「中核」による包摂に対しておこる「周辺」側のローカリティ再生について述べた。さらに*Growing the Game* (2006) においては、MLBを頂点とする人材獲得、マーケティング網が世界各地に広がりつつあることを指摘した。

ここまでの彼の論は、近年の野球のグローバルな拡大は、ひとえにMLBのビジネス戦略によるものであり、その結果として現れるのは、「中核」としてのMLBに収奪される「周辺」としての各国リーグというものであった。しかし、2011年の論文“Sport Labor Migration as a Global Value Chain”においては、ドミニカ野球に再び視点を移し、野球を通じた米国からドミニカへの富の還流という点にも言及し、人材供給側のメリットについても指摘した。

Kleinの一連の研究は、野球の普及・拡大をグローバル化の俎上に乗せ、これをMLBによる下部リーグの包摂というグローバルな系列化という視点で捉えた点において、現在のスポーツのグローバル化が、文化的な要因というよりも経済的要因により進んでいることを明確にしている。

しかし、彼が*Growing the Game*で示したモデルは、MLBと世界各地の野球組織との個別の支配-被支配の関係について述べてはいるものの、MLBの事実上の下部組織と化した各国リーグ相互の関係についてはほとんど述べられていない。また、彼があまり触れていない、野球のグローバルな拡大の帰結としての「周辺」の「中核」への還流と捉えることができる日米の独立プロ野球リーグや、これと同じ位相に立つ、その経済的豊かさゆえ彼が野球普及に関して否定的に捉えていた欧州各国リーグのプロ化の潮流は、現在のエンタテインメント産業化した野球を通じたネットワークが、MLBを頂点とする各リーグ相互のモザイク状の連関関係になっていることを示している。私はこのネットワークを「ベースボール・レジーム」と名付けたが、この枠組みを使用することで、現在のラテンアメリカの野球シーンはより鮮明に浮かび上がってくる。

2. グローバル資本に包摂されるラテンアメリカの表象としての野球

拙著『ベースボール労働移民』(2013)の前半部は、ラテンアメリカの野球シーンの紹介を通じて野球のグローバルな拡大とはいかなるものであるのかを論じている。

グローバル化の本質を読み解いたリッツァ (2005) は、この現象を、効率化に基づいた画一化の進行である「グロースバル化 (grobalization)」と、それに刺激されたローカリティの覚醒である「グローカル化 (glocalization)」の同時進行の過程であるとした。拙著においても、これに基づき、ドミニカ野球を論ずることで「ベースボール・レジーム」のグロースバルな側面を、メキシコ野球について論ずることでグローカルな側面を読み解いた。

現在、プロスポーツと資本との関係は切っても切り離せないものになっているが、ラテンアメリカ野球においては、とりわけ資本との結びつきは顕著である。トップ選手をMLBに送り出す役割を担わされている各国のリーグのプレーレベルは集客力を持たず、それゆえ、球団やリー

グの維持にはスポンサー企業の獲得は欠かせない。ユニフォームの空きスペースがことごとく企業広告で埋め尽くされている様子は、このことを端的に示している。

ベースボールキャップにみる「グロースバル」

エンタテインメント産業としての野球の普及、浸透による均質化の様相は、スタジアムの建設、メモラビリアグッズの販売、観戦風景などの諸相に現れてくるが、ここではメキシコの球場で販売されているキャップの変遷からこれを見よう。

米国では、野球産業は、単にプレーを見せるだけではなく、劇場空間である球場に客を集め、そこで飲食をさせ、メモラビリアグッズを購入させるといって、一種の消費パッケージへと変貌を遂げている。このような画一化された集客装置において、個々の装置は集客競争に勝つべく、その個性を示すために独自のストーリーを内包しようとする。このような状況をブライマン(2008)は、「ディズニー化」の語で表現した。

ラテンアメリカにおいては、いまのところ、野球というスポーツビジネスは日米ほど「ディズニー化」されていない。それでも、足を運ぶ度、球場空間は洗練され、単なる見世物の場から消費の場へと変貌を遂げている。

1995年、私が初めてメキシコの球場を訪れた時に、球場内外にグッズショップがあったのは首都のメキシコシティだけであり、商品もいまだ洗練されたものではなかった。とくに球場前で売られているシャツや帽子の多くは、球団とのライセンス契約なしに地元で作られ、販売されていた。

写真1は、1998年、南部の都市オアハカで入手したものである。地元チーム、ゲレーロスのロゴが入った手製の帽子は、いまだ地方都市では、野球を通じたマーチャンダイズ (merchandise) 展開が本格的にはなされていなかったことを示している。このような野球を通じたローカルな小規模ビジネスは、地元民に少なからぬ富をもたらしたことは想像に難くない。



写真1

前述のリッツアは、グローバル化の過程の一側面である「グロースバル化」を、「中央で構想、管理」された画一化された商品やブランドである「無 (nothing)」が拡大していく過程であるとしたが、21世紀を迎える頃のメキシコの野球シーンにもこのことはあらわれていた。

1990年代に急速に進んだMLBの国際化戦略は、MLB本体による人材獲得網、マーケティング網を広げただけではない。MLBと結びついた商業資本のグローバルな展開もまた促した。Klein (2006) は、MLBと結びついたアパレル産業のアメリカンファッションとしての欧州市場への可能性を指摘したが、MLBとその傘下のマイナーリーグのキャップのサプライヤーになっているニューエラ社はそれを実践していると言える。21世紀を迎えると、この企業による「グローバル化」は確実に進み、ラテンアメリカのプロ野球チームのオフィシャル・キャップは、ほぼこの社の製品に移し替えられた。

3. 「グローバル化」の表象としての野球

しかしながら、資本と結びついたかたちでの米国発の野球の浸透が、経済的にも文化的にも一方的な「アメリカ化」を進めたわけではない。野球を通じた米国資本のマーケティング網が拡大する一方で、いまだその野球を利用したローカルビジネスが幅を利かせていることもまた事実である。メキシコやドミニカでは、ニューエラ・キャップの模造品や、地元各チームのアパレルグッズが球場の外では販売されている。このような現象は、グローバル資本に抵抗するローカル資本という図式で捉えることができるだろう。

文化的にも、ロバートソン (1997) は、グローバル化の過程において、ローカルリティが再活性化されることを指摘し、リッツアもこれを受けて資本による商品の流通において、中央からのものとローカルなものとの融合が促される側面があるとした。これら「グローバル」な現象は、野球のグローバル化においても見ることができる。

Klein (1991, 1997) は、野球の普及は、政治経済的にはかなわない米国に対して「勝利」を収めることが可能な場をラテンアメリカの人々に提供していることを指摘し、これを「抗争の場」と名付け、野球が米国の政治経済の後背地で発展した要因であるとした。つまり、野球というアメリカン・スポーツの普及は、それにより他者を意識し、ローカルなアイデンティティを再活性化させる装置にもなっている。

スタンド風景にみるグローバル

1998年、私はメキシカンリーグ・プレーオフを観戦中にある光景を目にした。南部・タバスコ州のチームオルメカスの応援のチームのために隣国のグアテマラから応援団が駆けつけ、馬の人形をかぶった民俗芸能を披露していたのだ (写真2)。

グアテマラと野球はなかなか結びつかない。しかし、この国には20世紀初頭にはすでに米国から帰国した留学生により野球が伝わり、1920年代には隣国であるメキシコなどと共同で国際スポーツ大会を催すなど (McGehee:1994)、スポーツを通じたメキシコとの交流の歴史もっている。加えて、1998年には、グアテマラの隣国であるベリーズとの国境の町チェトゥマルにメキシカンリーグのチームが誕生している。このチームのニックネームは「マヤス (Mayas)」という「中米」を意識したものであった。メキシコ以上にメソアメリカにアイデンティティの源泉を求め、いまだインディヘナの伝統が残るグアテマラの人々にとって、これらのチームの



写真2

存在は「メキシコのスポーツ」である野球に多少なりとも意識を向けるきっかけとなっただろうと思われる。

米国に領土を奪われるのと並行して、メキシコはグアテマラの領土を奪っていった。米国とメキシコの支配—被支配の関係は、メキシコとグアテマラの関係に移し替えることができる。そのように考えれば、グアテマラの人々が、チェトマルやタバスコの野球チームに自らを同一化し、野球という「抗争の場」で「打倒メキシコ」を叶えるべく、これを応援することも理解できる。

一方で、グアテマラから見れば「中央」にあたるメキシコも、さらに視座を拡大すれば米国という「中核」に対する「ローカル」にしか過ぎない。そのような視点から見れば、米国発祥の野球を受容しつつも、スタンドでの応援で、民族楽器「マトラカ」を使用したり、「国民的スポーツ」である「ルチャリブレ（プロレス）」のマスクをかぶったりすることは、「アメリカン・スポーツ」を自らのゲームとして解釈しようという表れであると言える（写真3）。



写真3

おわりに：野球のグローバル化におけるラテンアメリカ野球の意味

本稿では、野球のグローバル化とはどのような現象なのかをラテンアメリカの野球シーンから述べてみた。米国の政治経済的影響力の強さから、同じラテンアメリカでありながら、ブラジルやアルゼンチンとは異なり野球人気が高いコロンビア、ベネズエラ以北の中南米カリブ地域は、野球の浸透を通じたグローバル化という現象が如実に表れている地域であることがお分かりいただけたかと思う。

最後に、今年のプロ野球シーンのスタートを飾ったWBCを今一度概観することによって、野球のグローバル化とはいかなる現象であるのかを振り返り、その近未来を私なりに予測してみたい。

ドミニカの優勝は、野球という競技の場が、途上国の人々にとっての「抗争の場」であることを如実に示している。政治経済の舞台では叶えることのできない「世界一」の称号を獲得したドミニカチームの存在は、母国・ドミニカだけでなく、米国に200万人いるとされるディアスポラ・ドミニカンたちにも大きな誇りを与えたことだろう。

同様に、下馬評を覆して準優勝に輝いたプエルトリコにとっても、WBCという舞台での躍進は大きな意味を持つ。米国自治領という政治的地位から、この地域の野球はMLBの支配をより強く受けてきた。地元プロリーグは、マイナーリーガーのシーズンオフの修行の場、稼ぎの場と化し、スター選手のいないスタジアムは閑古鳥が鳴いている。プエルトリコ冬季リーグは、近年試合数・球団数の削減を経験し、資金難からシーズンをキャンセルせねばならない事態にも陥っている。

これは、島全体が抱えている問題でもある。若者は富を求めて次々と本土へ渡り、かつて砂糖産業で栄えたこの島は空洞化が激しい。その姿は、「中核」に収奪される「周辺」の「低開発」そのものである。WBCでの躍進が、ただちに島の経済活性化につながるわけではないだろうが、野球界においては、ファンの呼び戻しに成功し、リーグは再び活況を呈するかもしれない。

しかし、「ベースボール・レジーム」のもとでは、このような国際大会での躍進によって各国の野球人気が向上したとしても、その利益は結局のところ資本の論理に回収される。大会の収益のほとんどはレジームの頂点である主催者のMLBに帰るところとなる。

今回初出場ながら、予選大会において自国にプロリーグをもつパナマ、ニカラグア、コロンビアという国々を破り、本大会出場を決め、善戦したブラジルについて言えば、選手にとってはこの大会が自分をより高い報酬を得る場所を得るための、また、安価で良質な人材を求めるMLBに代表される各国プロリーグや球団にとっては、スカウティングのための絶好の機会として機能したことだろう。第3回WBCという国際大会は、これまでサッカー選手の「産地」でしかなかったブラジルの野球の世界における人材市場としての価値を上昇させる場でもあった。

野球というゲームをどう捉え、どう実践するのかが個々人の認知に委ねられているのは言うまでもない。しかし、グローバル化のひとつの帰結として発生した「ベースボール・レジーム」の下では、野球を通じたローカリティの覚醒、娯楽性、富の獲得までもが、結局のところは、資本の論理に回収されてしまうことを、ラテンアメリカの“Béisbol”は我々に示している。

〈参考文献〉

- ・ ブライマン, アラン、森岡洋二訳 (2008) 『ディズニー化する社会—文化・消費・労働とグローバリゼーション—』
- ・ 石原豊一 (2013) 『ベースボール労働移民—メジャーリーグから野球不毛の地まで—』河出ブックス
- ・ Klein, Alan M. (1991). *Sugarball: The American Game, the Dominican Dream*, Yale University Press.
- ・ — (1997). *Baseball on the Border: A Tale of Two Laredos*, Princeton University Press.
- ・ — (2006). *Growing the Game: The Globalization of Major League Baseball*, Yale University Press.
- ・ — (2011). Sport Labour Migration as a Global Value Chain, in Joseph Maguire & Mark Faloutsos (ed.), *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 88-101.
- ・ McGehee, Richard V. (1994). Sports and Recreational Activities in Guatemala and Mexico, Late 1800s to 1926, *Studies in Latin American Popular Culture*, 13, 7-33.
- ・ リッツア, ジョージ、正岡寛司監訳 (2005) 『無のグローバル化—拡大する消費社会と「存在」の消失—』明石書店
- ・ ロバートソン, ローランド、阿部美哉訳 (1997) 『グローバリゼーション—地球文化の社会理論—』東京大学出版会

(いしはら とよかず 立命館大学大学院国際関係研究科研究生)